

## 優秀賞

### 守ろう伝えよう きれいな水環境

高岡市立牧野中学校 二年 榎谷 百華

私の水筒に入っているのはいつも「水」。スーパーなどで選ぶ水にもこだわりがあります。一番好きな水の採水地を調べてみると、富山県の砺波市東保でした。岐阜県の庄川源流から砺波平野へと流れ込む間に良質の花こう岩によつてろ過され、おいしい軟水になるそうです。この砺波市を含め県内の4つのエリアが環境省の「名水百選」に選ばれていて、その数は全国で一番多く、富山の水はおいしくて、水環境もとても素晴らしいのだと思います。しかし、歴史的にみると、この水環境は当たり前ではありませんでした。

今から約百年前に富山市を流れる神通川流域で流行した「イタイイタイ病」です。患者たちが「痛い痛い」と泣き叫びながら死んでいったことから、この病名が付けられたことを小学校の授業で学び、ショックを受けたことを覚えています。神通鉾山から排出された『カドミウム』が神通川やその流域の土壌を汚染し、そこでとれた米や魚を食べたり、水を飲んだりしてカドミウムが体内に入ることによって病気が引き起こされました。進行すると骨が弱くなり少し動いただけでも骨が折れてしまうのです。今年、イタイイタイ病の原因企業を訴えた住民が裁判で勝訴してから五十年という節目の年にあたることを新聞で読みました。流域には今もまだ患者がいて苦しんでいる人がいることを知り、一度、水環境が悪化すると、元の環境に戻るまでに気が遠くなる程の時間がかかることを改めて感じさせられました。

世界では今、七億六千八百万人の人々がきれいな水を使えない暮らしをしていて、不衛生な水を利用していているせいで、毎日約千八百人の子供たちが命を落としているそうです。蛇口をひねるだけできれいな水が出るといことが、どれだけ幸せなことがわかります。そして、一人一人の意識で水をきれいに保つていくことが日本だけでなく、世界の水を守っていくために大切なのではないかと考えました。そこで私は、きれ

いな水環境を守るために、自分が心がけていくことを二つ決めました。

一つ目は、「食事は必要な分だけつくり、飲み物は飲みきれ分だけ注ぐ」ということです。食べ残しや飲み残しがあると、それを水に流したり捨てたりするので水が汚染されてしまいます。例えば、しょう油大さじ一杯を魚の住める水質にするために必要な水の量は、浴槽一杯分を三百リットルとすると、浴槽一・七杯分、味噌汁一杯の場合は浴槽二・五杯分が必要です。何気なく捨てているかもしれないが、元のきれいな水に戻すまでにこんなにも大量の水が必要だとわかりました。私の場合食事は食べきれ分だけよそうようにしていますが、お茶などの飲み物は、飲みきれなくて捨ててしまう事があります。それを無くすために、責任を持つて残さず食べたり飲んだりしていこうと思います。

二つ目は、「お風呂でのシャンプー・リンスは適量を守って使う」ことです。使いすぎてしまうと、食べ物や飲み物を流してしまうのと同じように水が汚染されてしまいます。こうして調べてみると、生活している水を使う様々な場面で気付かないうちに水を汚していることを知りました。限りある資源である水をできるだけきれいに保つために、汚れた水ができる限り流さないようにする努力を少しでもしていきたいと思いません。

世界中の人がきれいな水を使うことができる環境になるには私一人の心がけはとても小さなことです。しかし、身の回りの『水』との向き合い方を見つめ直して大きな力につながれると思います。「きれいな水を守る」という意識を高め、その意識を伝えていくこと。小さな一歩を着実に進めていきたいです。